

江戸川乱歩「孤島の鬼」の着想を巡って

小 松 史生子

はじめに

「孤島の鬼」は、江戸川乱歩の作品史の中でも、もっとも重要なテクストの一つである。第一回が掲載されたのは博文館の大衆娯楽雑誌『朝日』一九二九年一月号で、これは当該誌の創刊号である。「朝日」への連載経緯については、乱歩「探偵小説十年」（平凡社版『江戸川乱歩全集』第十三巻 一九三二年五月）によれば、当時『新青年』編集長を退き博文館編集局長の座に就いた森下雨村の熱心な勧めを否みがたく、前年から続くスランプの時期のさなか、自信がないながら引き受けてしまったと回顧されている。が、乱歩は同年八月から講談社の大衆誌『講談倶楽部』に後期長編第一作に当たる「蜘蛛男」の連載を開始し、且つ、「悪

夢」（後に「芋虫」に改題）、「押絵と旅する男」、「蠱」、「何者」といった、粒よりの短編をまとめてこの年に発表していることに鑑みて、実際のところはこの一九二九年は非常に生産性の高い一年であったとみなされる。加えて、この年が乱歩にとって短編から長編へ小説の形式をシフトする分水嶺に該当していることも明白で、したがって「孤島の鬼」の重要性は乱歩の作品史上において後期長編群へ移行するための試作品、実験作の趣が強いテクストである点に求められる。強いて極言すれば、もし「孤島の鬼」が失敗作となったなら、乱歩は「蜘蛛男」から始まる一連の後期長編群を書かなかった可能性も考えられる。「蜘蛛男」の連載は『講談倶楽部』一九二九年八月号からである。この頃、既に先行していた「孤島の鬼」は、もはや全体の中盤を過

ぎ、物語の起承転結がかなりはつきり見通せていた——つまり、乱歩は自分にも長編探偵小説が書けるといふ手応えを感じ始めていたのではないかと推測される。

以上を以て、本論は乱歩の作品世界の転回点となった重要なテキストとして「孤島の鬼」をみなし、その着想源を追う調査を基盤に、乱歩が試みた長編探偵小説のナラティブ分析を試みるものである。

一、土地の名

「孤島の鬼」の『朝日』連載初回は一九二九年一月号からであり、乱歩はこの小説を執筆する直前、想を練るために三重から和歌山へかけて冬の旅に赴いている。

そして第一回を書く時分には、もう寒い季節になっていたので、寒さの嫌いな私は三重県の南の方の不便な、併し非常に暖い漁村へ旅行して、そこで筋を考えた。近くの鳥羽の岩田準一君に、その宿へ来て貰って、毎日舟に乗ったり、村はずれを散歩したり、寝転んで話しをしたりして日を暮らした。その岩田君が、「鷗外全集」を持って来ていて、その中に何かのついでに二

三行書いてあった片輪者製造の話を読んで、非常に面白く感じた。それがマアあの小説の出発点になったのだ。

へんぴな村の宿屋へ、変な都会風の男が二人泊まり込み、何をするでもなくブラブラ暮らしている上に毎晩夜更かしをして、お昼頃まで寝ているものだから、宿屋でも妙に思ったのかも知れない。それがお巡りさんの耳に入って、丁度その頃陛下が伊勢神宮へ行幸のことがあったので、一時は不逞の徒ではないかと怪しまれさえした様子だ。

(前出「探偵小説十年」(昭和三年度)の項)

右の回想の文章が言っている「時分」というのは、初回連載の時期を考えると、一九二八年の十一月あたりか。ちなみに、昭和天皇は同年十一月に京都御所で即位の大札を行っている。慣例に従って大嘗祭後の十一月二十日に伊勢神宮へ親謁の議に詣でているので、乱歩の回想と一致する。ために、ここで右の文章の回想は一九二八年十一月のことと確定できる。乱歩は連載に先立って、プロットの着想源を求めて実際に「孤島の鬼」の舞台となる土地の近くへ来ていたのだ。おそらく、前年の休筆期間の放浪中に訪れた紀州の風土に惹かれるものがあったのだろう。

ここで「前年の休筆期間」の確認をとっておこう。乱歩は一九二七年から約一年半の間、休筆²をよいことに日本各地を放浪して廻っている。翌年には「陰獣」(『新青年』一九二八年八月号〜十月号)を発表して執筆を再開するものの、「新青年」とは心理的距離が生じ、乱歩は以後、大衆娯楽誌へ掲載メディアを転換することになる。したがって、この一九二七年の休筆期間というのは、単に『新青年』との確執による現実逃避という意味合いもあつたろうが、それは同時に自身の作品世界を短編から長編へシフトさせる準備期間でもあり、乱歩はこの時期にプロットの構想を従来の短編向きのそれから長編に適うものへ変化させる具体的な戦略を構想する必要があつた。そのため放浪の旅をしたのであれば、この旅のルートには乱歩が求めていた何らかの着想源が存在するはずだ。

その見通しのもと、再び「探偵小説十年」(昭和三年度)の項からの引用文に戻り、具体的に乱歩が訪れた場所の手がかりを探れば、「三重県の南の方の不便な、併し非常に暖い漁村」という記述がある。ここはいったい何処なのか? 「近くの鳥羽の岩田準一君に、その宿へ来て貰つて」とあるので鳥羽近郊と思えるが、鳥羽エリア自体ではなからう。「三重県の南の方」という記述に即して地図を辿れば、三重

と和歌山の県境に位置する新宮付近ではなかつたろうか? この見当を検証するために、「孤島の鬼」に描かれた風景描写を参照してみる。

「孤島の鬼」の物語後半の舞台は、和歌山県の沖合に浮かぶ岩屋島だ。岩屋島はもちろん架空の孤島であるが、乱歩が前年の休筆期間に引き続き一九二八年十一月の旅で三重を再訪し、「そこで筋を考えた」と回想していることに鑑みると、モデルとなつた風景は実際に存在する可能性がある。そこで、作品の主要人物である箕浦金之助と諸戸道雄が物語内で旅するルートからその可能性を探っていくことにする。殺された木崎初代の遺品から岩屋島の在所を割り出した箕浦と諸戸は、東京を離れ、岩屋島へと旅立つていく。彼らの辿つたルートは左記である。

【東京↓鳥羽】汽車

【鳥羽↓紀伊のK港】定期船(一日がかり)

【K港↓岩屋島】漁師の小舟(海上二里)

物語内容時間では、この旅は「大正十四年八月十九日」と設定されている。そこで、この頃の鉄道事情を参照すると、伊勢神宮への参詣ルートとして参宮鉄道が関西鉄道と

合併する形で亀山と津と相可（現在の多気）と宮川を結んで開業したのが一八九三年。その後、一八九七年に宮川と山田（現在の伊勢市）が結ばれ、さらに山田と鳥羽間が結ばれたのが一九一一年である。東京との直通列車の開業は一九二六年のことなので、箕浦と諸戸は東京を出発してから、まず東海道本線で名古屋に向かい、そこから関西鉄道で三重県の亀山まで至り、参宮鉄道に乗り換えて山田、鳥羽と乗り継いでいったと推測される。とはいえ、存外に年月日には無頓着な癖のある乱歩なので、執筆時期が一九二八年ということもあり、うっかり東京直通を開業してから参宮線を念頭に置いて書いたかもしれない。

次に鳥羽から紀伊のK港へのルートであるが、これはこのK港がどこに当たるのかを確定しないと割り出せない。「孤島の鬼」テキスト本文には、手がかりとして次の言がある。（以降、引用文の傍点は論者による）

○和歌山県の南端のKという船着き場

○港そのものがうら淋しい漁師村にすぎないのに、さらに断崖になつた人も住まぬ海岸

○（前略）中継ぎのK港に上陸した。／棧橋はすなわち魚市場の荷場所で、魚形水雷みたいな鰹だとか、腸

の飛び出した、腐りかかった鮫だとかが、ゴロゴロところがり（後略）

○沿岸の景色は、どこの半島にもよく見るような、切り立った断崖の上部に、こんもり森の緑が縁どり、山と海とがただちに接している感じであった。（中略）諸所に胎内くぐりめいた穴のある奇岩がそり立っていた。

紀伊半島の南端でKの頭文字がつく漁港を有するエリアというところ、勝浦と串本が考えられようか。どちらも当時、鳥羽港から船で向かう航行ルートがあった。このうち、勝浦エリアは半島最南端よりかなり北東へ上った地点であり、また昔から熊野那智大社への参詣に便利な場所であり、「うら淋しい漁師村」というにはやや抵抗がある。それに、勝浦港が漁獲量日本一を誇る魚は鰹ではなく鯖だ。これに対し、串本エリアはまさに半島最南端の潮岬を有し、港に水揚げされる魚は鰹である。さらには、橋杭岩や古座の荒船海岸など奇岩の宝庫でもあり、「胎内くぐりめいた穴のある奇岩」はいわゆる風穴を指すとすれば、そのような眺めは随所に存在する。したがって、テキスト本文から推測するならば、K港というのは古座を含んだ串本港界隈である可能性が高い。

さて、仮にK港が串本港であると比定するならば、岩屋島は紀伊大島であるかとする見通しも出てこよう。現在、紀伊大島は串本の本土とくしもと大橋で結ばれているが、このくしもと大橋が架けられたのはつい最近、一九九九年のことであり、それまでは潮岬から苗我島を中継して大島に至る巡行船が交通の手段だった。「孤島の鬼」で箕浦と諸戸を岩屋島へ運んでくれるのも、老漁夫が操る小型の釣舟である。古くから大島へは串本から漁師が渡って漁をしており、江戸時代には風待ちの港として、また捕鯨の港として栄えた歴史がある。一方、海岸沿いは険しい崖が切り立ち、崖の周囲には危険な暗礁も多い難所でもあった。代表的な景観が、海金剛と呼ばれる南側の海岸線である。以上の紀伊大島の景観と、「孤島の鬼」テキストに描かれた岩屋島のそれとを確認のため照らし合わせてみる。

○全島が岩でできているらしく、青いものはほんの少ししか見えず、岸はすべて数十尺もある断崖（後略）
○（前略）断崖の裾が、海水のために浸食されてできただものであるう、まっ暗な、奥行き^{おくぎ}の知れぬほら穴^{ほらあな}になつているところがあった。

○（前略）いま舟で廻つてきた岬の端が、牛の寝た形

に見えた。

○岩屋島の断崖は複雑な凸凹をなして、その一ばん出っ張った部分に魔の淵のほら穴があった。

○岩屋島の西がわの海岸で、それは諸戸屋敷とは中央の岩山を隔てて反対のがわなのだが、ほとんど人家はなく、断崖の凸凹が殊に烈しくて、波打際にさまざまの形の奇岩がそそり立っている。その中に一と際目立つ烏帽子型の大岩があつて、その大岩の頂きに、ちょうど二見が浦の夫婦岩のように、石で刻んだ小さい鳥居が建ててある。何百年前、この島がもつと賑やかであつたころ、諸戸屋敷のあるじが城主のような威勢をふるっていたころ、この海岸の平穏を祈るために建てられたものであろう。

右の本文テキストから推量する限りでは、岩屋島とみるには紀伊大島は少々規模が大きすぎ、捕鯨で栄えたという歴史も華やかすぎるかもしれない。もつとも、「何百年前、この島がもつと賑やかであつたころ」を捕鯨華やかなりし頃と解釈すればよいのかもしれないが。島の西側の鳥居の存在も、海金剛の傍にある雷公神社^{なるかみかみ}らしくもあるが、この神社は東側の海岸にあるのがネックだ（もつとも、この島

居の風景は乱歩の純然たる空想であるという解釈も成り立つから、決め手にはならない。

してみると、少し串本漁港から北へ遡るが、むしろ古座川河口沖に浮かぶ九龍島を岩屋島に比定するのはどうだろうか。九龍島は無人島であり、テキストの「ほとんど人家はなく」という箇所該当するかと思われる。また、その昔は熊野水軍の拠点であったといわれ、木崎初代の父方の実家である樋口家の祖先が倭寇であり海賊の血筋に連なるという「孤島の鬼」大団円の記述を想起させるものがある。九龍島は古くは黒島と呼ばれていたことが、『紀伊半島海道図絵』（一七九〇年代頃）や『紀伊続風土記』第3輯（帝國地方行政会出版部 一九一一年）で確認できる。このうち『紀伊続風土記』には、島には弁財天を祀った社があり、またあかり穴と暗がり穴と呼ぶ二つのほら穴が存在しているという記述が見られる³。実際、今でもこの島にはいくつもの洞窟があつて、波が岩を侵食して穿った海食洞も存在し、これは「孤島の鬼」テキスト本文の岩屋島の説明「海水のために浸食されてできたものであろう、まっ暗な、奥行きのお知れぬほら穴になっているところがあつた」と合致する。もし、「探偵小説十年」の回顧にある「三重県の南の方」が新宮付近であったとするなら、そこから古座エリア



まではあと一息だ。そこで乱歩は岩田準一と一緒に「毎日舟に乗ったり」していたと回想しているが、古座港から九龍島へは舟で渡れる近距離で、現在でも観光客はそうして九龍島へ渡っている。一九二七年の最初の放浪の旅について、「探偵小説十年」(昭和二年度)の項の冒頭には、「信州のどこどころ、新潟から魚津のあたり、或は千葉半島の一周、伊勢から紀州にかけての海岸の放浪、京大阪の三カ月、名古屋の耽綺社の集りと、一年余りの間、殆ど東京を外に暮らしていた」とある。つまりはちょうど現在の紀勢本線に沿う国道42号線ルート沿いの海岸を旅していたとみえ、翌年の再訪もおそらくこのルートであったとすれば、新宮から古座、串本というエリアに、「孤島の鬼」着想源となる風景を比定する可能性は高いのではなからうか。

さらに関心を引く点は、この九龍島は南方熊楠が植物採集のために訪れた場所⁴で、現在は「熊楠曼荼羅の風景地」として国の名勝に指定されている島であることだ。一九二八年の乱歩の旅の道連れは岩田準一である。岩田準一は竹久夢二と親交が深く、絵画をよくして乱歩「パノラマ島奇談」の挿絵を担当し、また『明星』にも作品が掲載されるなど文筆表現にも長けていた一方、気鋭の民俗学者でもあって、彼が乱歩と共に始めた男色文献研究は傑出した成果を

収めた。彼は一九三一年から南方熊楠と男色に関する討論書簡を交わすようになり、両者の文通は一九四一年まで続く。九龍島に所縁のある南方熊楠の名前が、ここで挙がってくるわけだ。乱歩が「孤島の鬼」を着想する一九二八年頃から、岩田の方は民俗学方面への関心を抱き、志摩の郷土資料の筆写を精力的に開始している。一九二九年に昭和天皇が鳥羽の神島に行幸した際、熊楠が天皇に粘菌についての講義を行った事実はよく知られているが、それ以前から岩田は当然南方熊楠の存在を知っていたと思われる。鳥羽在住の岩田準一の念頭に熊楠の存在があり、それに絡んで九龍島の伝承をも乱歩に語ったとも推測できるのではなからうか。

ところで、箕浦金之助のモデルはこの岩田準一であるという説もあるが、乱歩自身は岩田と自分の仲を邪推されることを恐れていた節がある⁴。このあたりの事情はデリケートなために今後明らかにはなるまいが、「孤島の鬼」の着想源の一つに当時岩田が持参した『鷗外全集』がヒントとなったという乱歩の述懐からは、同じ森鷗外の短編「独身」(『スバル』一九一〇年一月号)に名前が出る長浜の小児科病院の院長の名前が箕村で、箕浦と語感が似通うことが気になる。というのも、岩田が一九二八年当時に乱歩の許へ

持参した『鷗外全集』がどの版のどの巻であるかは推測による他はないのだが、年代の場合と一〇二七年刊行の『鷗外全集』、それも第五巻ではないかと思われるからだ。この巻には「キタ・セクスアリス」(『スバル』一九〇九年七月号)が収録されており、この小説で触れられている見世物が、乱歩の言うところの「片輪者製造の話」に該当するためだ⁵。そして、この第五巻に「独身」も収録されており、乱歩はここから「孤島の鬼」の登場人物の名前を思いついたのかもしれない。さらに同巻には、乱歩好みの美青年が主人公である「青年」(『スバル』一九一〇年三月号〜一九一一年八月号)も収められている。岩田と乱歩は同性愛研究での同志であったことから、旅の話のネタに岩田が森鷗外における同性愛文献として、この一九二七年版『鷗外全集』第五巻を持参したと考えてもおかしくはない。「孤島の鬼」における同性愛描写は、おそらくは同巻に収録されていた鷗外「青年」における美青年・小泉純一と彼をめぐる男達の関係性に触発され、それに乱歩自身の体験や嗜好が投影されて、着想されたものではなかったろうか。換言すれば、「孤島の鬼」における森鷗外の作品の影響は、「キタ・セクスアリス」よりもむしろ「青年」の方が、乱歩が回顧文で触れていないだけに、より重要であるとも言える。

もし以上の推測に妥当性があるとすれば、では箕浦と並んで同性愛者の一方である諸戸道雄の着想源も追えるのではなからうか。そうした推測のもと、一九二八年前後の三重と和歌山を巡った乱歩の放浪の軌跡を辿る調査の過程で、興味深い実在の人物が浮上した。

二、人の名

前出「探偵小説十年」にあるように、乱歩が当時、東京方面から鳥羽、そして三重と和歌山の県境方面へまで放浪してきた場合、その旅程の通過地点に三重県桑名がある。名張が乱歩の生誕地ということもあり、乱歩にとって三重の地は親しみのある地域であった(『三重風土記』／『小説新潮』一九五三年五月)から、当然桑名のこともよく知っていたことだろう。ところで、東海道の宿として七里の渡して有名なその桑名に、実は諸戸を名乗る財閥の一族が存在するのである。

加路戸新田(現桑名郡木曾町)で代々庄屋を勤めていた家柄の諸戸家に生まれた清六は、父・清九郎が負った二〇〇〇両もの負債をわずか三年で完済する実業面の才能を若くして発揮し、大隈重信を筆頭に明治新政府の高官や三菱

財閥との人脈を作りながら事業を拡大、「日本有数の大地主」「林産王」と呼ばれた人物である。一方で、彼は当時飲料水事情が劣悪だった桑名のために私財を投じて上下水道を敷設し（諸戸水道と呼ばれる）、公共事業にも貢献した。

初代の清六が一九〇六年に亡くなると、次男の清太が家屋敷を継いで諸戸宗家（西諸戸家）を名乗り、四男の清吾が二代目清六となって諸戸本家（東諸戸家）を名乗る。清吾は、兄の継いだ屋敷の北隣に、自分の新居を建てた（一九一一年）。これが現在、国の重要文化財に指定されている六華苑で、洋館と和館が壁一つで衝突するかのようにつながされている珍しい造りをしている。設計したのはジョサイア・コンドルで、六華苑は東京以外の地方に現存するほぼ唯一のコンドル設計の建築として貴重なものである。

六華苑建築をコンドルに依頼した当時の諸戸清吾は、じゃっかん二十三歳であった。彼は、家業を引き継ぐため十八歳の時に桑名に戻るのだが、それまでは父と親交のあった大隈重信が設立に関わった早稲田中学に通い、東京で学生生活を送っていた。早稲田中学は一八九五年に創立、翌年に開校、一八九七年には地方出身の学生のために寄宿舎を設けるなど、地方から優秀な人材を集めることに開校当初から目を付けていた。そして一九〇一年、早稲田中学の



六華苑公式 HP より
(URL : rokkaen.com 桑名市役所ブランド推進課提供)

校舎内に早稲田実業中学——後の早稲田実業学校が開校する。諸戸清吾が早稲田中学を退学したのは一九〇四年前後のことと推測されるので、彼は早稲田実業学校が母校に開校された当時に在籍していたことになる。ここで想起され

るのは、「孤島の鬼」の箕浦の母校が早稲田実業学校（テキスト本文では「W実業学校」）に設定されていることだ。同じ早稲田の系列ではあるが、乱歩自身が在籍したのは早稲田大学予科である。桑名有数の財閥の二代目を継いだ実在の若き諸戸清吾が、「孤島の鬼」の主人公・箕浦金之助と出身校を同じくするというのは、偶然の符合であろうか否か。

第一次世界大戦勃発とそれに伴う軍需品輸出貿易による好況が一九一五年頃から始まり、日本の重化学工業が飛躍的に発展した世相を背景に、実業家の存在が占める社会的地位とその影響力も甚大なものになっていくのが大正期である。この時期、若者教育について熱心に活動を行っていた新渡戸稲造は、『新日本』一九一五年十一月号に「大正青年の進路」という文章を寄稿している。

吾輩が大正の青年に望む所は、先づ実業的方面に発展を図ることである。明治の思想が空理空論に終らぬやうに、着実な進歩を遂ぐるには、どうしても実業の力に俟たねばならぬ。何事業も先づ精神的の動機であるが、我邦に於てはこの動機は既に明治時代に与へられて居る。よし動機があつて之を実現する為には、實力を要するのだが、我国に於てはこの實力に欠けて居

る。吾輩は固より唯物論者ではない。単に物質的に進歩すれば大正の目的は其で達成し得ると云ふ爾く物質信者でない。併乍、世界の形勢を瞥見するに何をすることも物質上の力が前提である。精神一到何事不成と力んで見ても、愈々事を為すに当つては先づ物質の力に依らなければならぬ。戦争でも勇氣のみでは勝てない、現に今日の戦争は理化学の応用に依つて勝を制すると云ふ有様である。此の理化学を応用するには資力を要する。斯んな事は自明の理であつて青年諸君の既に熟知な事である。（中略）我国に於ては実業或は學術上に貢献しても之に名譽の伴ふことが少い。（中略）故に同じ学問をするにも法律政治の学科を選択し、実業に就くにしても成だけ筆と口とで儲け得るやうな事業をのみ好み、手足若くは思慮を要するやうな事業を避けるやうな風がある。吾輩が茲に如何程実業界に向ふべしと云つても又理化学、博物学に志せよと云つても、遠い将来を慮ることの出来ぬ青年は矢張り政治、法律等の科目を選ぶのである。

桑名を代表する実業家・諸戸家の跡継ぎ息子が、早稲田実業学校の前身となる早稲田中学に学んだのは、こうした

当時の世相動向に適う進路であった。一方、小説の中の簀浦金之助は自身の志向とは相容れない対象として、実業学校出という出自を苦々しく捉えている。食べていくために仕方なく実業学校を出て貿易会社に勤めたと述べる簀浦だが、東京丸の内にオフィスを構える外資系合資会社に職を得たという時点で、既に当時の平均的な就職状況からみればかなり恵まれた環境である。にもかかわらず簀浦は、「小説や絵や芝居や映画が好きで、一ぱし芸術がわかるつもりでい」て、それがために会計帳簿を付けそるばんを弾くような実利・経済一辺倒を要求される実業学校出という出自を厭っているのであるが、しかしその二つは決して両立しないものではなかった。実在の諸戸清吾の略歴がそれを物語っている。

二代目清六となった諸戸清吾は、青年期を東京で過ごし、また一九二一年に欧米漫遊旅行を経験した影響で、なかなかのモダニストだったらしい。桑名の著名実業家をピックアップした田中宗太郎編『大桑名に輝く人々』（大桑名に輝く人々編纂協会 一九三八年六月）には、洋装で髪をきっちり撫でつけ、肩肘をつけて気取ったポーズを取る諸戸清吾の



図1

トルソー写真が掲載されている（図1）。また、『旧諸戸六郎調査報告書』（一九九二年三月）に収録された、旧諸戸邸（現六華苑）洋館の内装を写した「図32 一階客間」の古写真では、家族の背後にスマートな洋装姿でスラリと立つ美青年の諸戸清吾が確認できる（図2）。文芸や絵画や芝居、映画を味わい、「一ぱし芸術がわかる」ためには、そうした趣味を支える経済的余裕が必要なのであり、実業学校出という出自はそれを可能にする手段ともなった。

乱歩は一九二六年八月に、『早稲田学報』に乞われてエッセイ「探偵趣味」を寄稿したが、「この頃私が早稲田大学卒業者であることがわかったと見え、学報の記者が来られて依頼を受けた」と「探偵小説十年」へ大正十五年度」の項で回想している。この時、



図2

記者との会談で同じ三重県出身の著名な早稲田系列OBとして諸戸清吾の名前が話題に出たのかもしれない。

よしんばそうでなくとも、もう一つ推測の手がかりがある。大阪朝日新聞の一九二四年七月一日付紙面に、二代目清六が邸宅と庭園を桑名町へ寄付して一般開放する予定であることが報じられているのだ。一九二四年といえば、乱歩が大阪毎日新聞社広告部に勤めていた時期と重なる（乱歩の退社は同年十一月三十日）。同じ大阪のライバル紙の記事を目にする機会もあったろうから、三重の同郷で早稲田の先輩に相当する「諸戸」という姓を印象的に覚えたかもしれない。『早稲田学報』記者の訪問も大阪朝日新聞の記事も、「孤島の鬼」執筆時期に近い年度のことであるのは注目してよいと思われる。

そもそも乱歩は、小説の登場人物の名前を自分の周囲の友人・知人から借りることがたびたびあった。それは処女作『二銭銅貨』（『新青年』一九二三年四月号）から既に見られることで、この小説に登場する松村武という男の名前は、鳥羽造船所時代の同僚・松村家武から借りている。また、「お勢登場」（『大衆文芸』一九二六年七月号）の悪女の名は、その松村家武の妻の名前と「偶然同じ」と告白して、毒婦の名に旧友の妻のそれを使用した形になった事態に恐

縮して詫びている（『探偵小説十年』（大正十五年）の項）が、おそらくこれも実のところ彼女の名前を無断で借りたのだろう。その他、「闇に蠢く」（『苦楽』一九二六年一月号（十一月号）の登場人物・野崎三郎も、鳥羽造船所にいた社員の名前から借りたことがわかっている。乱歩は「陰獣」で実践したように、自分の名前すら作中で利用した。とすれば、「孤島の鬼」においても、その登場人物と同じ姓を名乗る人物が乱歩の周囲に当時実際にいたのなら、そしてその人物が桑名や早稲田といった乱歩と縁のあるキーワードを共有するのであるならば、その実在人物の名前が小説の登場人物のそれに採用される事態は、十分あり得る。

つまり、「孤島の鬼」の登場人物に関する以上の情報を整理すると、次のようになる。

- ① 養浦金之助の名前は、一九二七年版『鷗外全集』第五巻収録「独身」の登場人物・箕村と語感が似通う。
- ② 養浦金之助と諸戸道雄の同性愛描写は、同『鷗外全集』第五巻収録「青年」の小泉純一と大村荘之助の関係を語る鷗外の文章と通じるものがある。
- ③ 諸戸道雄の姓は、実在の桑名の財閥・諸戸家と符合する。
- ④ 養浦金之助の出身校の設定は、桑名の財閥諸戸家の清

吾のそれと同じである。

これらの情報に、前章の風景モデルの検証を加えれば、一九二七年～二八年にかけての三重から和歌山への乱歩の放浪が、「孤島の鬼」誕生において不可欠な着想源を与えた重要な旅であったことが推測できる。いずれの情報も確証は得られないとはいえ、高い蓋然性があることは否定できないと思えるが、いかがであろうか。

ところで、実在の諸戸財閥の二代目当主と「孤島の鬼」テキストの間には、実はもう一つ、気になる符合がある。それは、諸戸清吾が所有していた別荘である。諸戸清吾は、鎌倉、日光、沼津に別荘を所有していた。このうち、鎌倉の別荘は株式仲買人・福島浪蔵の別邸だったものを一九二一年に清吾が譲り受けたもので、由比ガ浜駅に近い木造二階建ての洋館建築である。関東大震災にも耐え、戦時下でも無事に乗り切って、現在は長谷子ども会館として使用されている洋館がそれで、旧諸戸邸として知られている建物だ。「孤島の鬼」の深山木幸吉探偵の住居が由比ガ浜に近い木造洋館であるという設定と、なにがしか関連があるので、はと深読みしたくなる。もっとも、深山木探偵の住む洋館は「チャチな青塗り木造」で、「アトリエか何かのお古と見

えて、広間のほかに小さな玄関と台所のようなものがついているきりで、その広間が、彼の書齋、居間、寝室、食堂を兼ねているきり」といったつましい建物であるのに対し、長谷の旧諸戸邸はギリシア建築様式をバルコニー設計に取り込んだ華麗な装飾を持つ堂々たる建物であるのだが。

三、再構成される風景

前章までの情報と推測を視野に入れた上で、「孤島の鬼」で乱歩が試みた、短編から長編へシフトする戦略性について考察をほどこすと、どのようなテキスト解釈が導き出せるであろうか。

まず一つには、作家自身が自嘲的に非生産的な時期のようには回顧していた休筆期間が、むしろ創作活動を活性化させる豊富な着想源を得るための時期であったと見直される。この期間の放浪で得た体感で、乱歩は短編から長編へ小説の構造をシフトするテクニクとして、「風景探し」というテーマを織り込む着想を得たと考えられる。

「孤島の鬼」には、物語の展開や登場人物の現在および過去に絡んで、それぞれふさわしい土地の名が配置されている。そのうち物語後半部は既に前章で分析したので、左記

には物語前半部（「はしがき」）、「悪魔の正体」に出てくる土地の名を簡便に一覧化する。

①【東京、丸の内】箕浦金之助と木崎初代が勤めるS・K
商会

②【東京、早稲田周辺】箕浦金之助の下宿

③【東京、巣鴨宮仲】木崎初代の養家

④【大阪、川口】幼い木崎初代が養父母に拾われた船着場

⑤【東京、日比谷公園・銀座】箕浦と初代がデートをする

場所

⑥【東京、池袋周辺】諸戸道雄の住居と研究実験室

⑦【鎌倉、湘南近辺】深山木幸吉探偵の事務所

⑧【東京、鶯谷】尾崎曲馬団が興行した町

⑨【東京、神田神保町】箕浦と諸戸が会合をする洋食屋

登場人物の生活空間に設定されたこれらの土地の名は、すべてに乱歩自身の転居の軌跡を重ね合わせることができ
る。①は実際に乱歩は丸ビルのオフィスに勤めた経験があり、②・③・⑨は学生時代の下宿のあった場所、④は大阪時代の住居に近く、⑤はよく飲食をしに行った街、⑥は終の棲家、⑦はちょうど「孤島の鬼」連載中に家族と大仏裏

に借家して避暑をしている。⑧は上野エリアであるとなせば、乱歩のお馴染みの散歩ルートということになる。すなわち、これらはすべて乱歩が実見した土地であることを意味する。そして、この物語前半部から物語後半部への展開は、そのまま乱歩の三重々和歌山への放浪の旅で実見した土地の情報への移行として捉えることができよう。

この前半部から後半部へのナラティブ展開と土地情報の移動がびったり重なっている構造は、「孤島の鬼」テクストの根幹を支える着想である。前半部から後半部へのシフトの契機は、箕浦が死んだ恋人・木崎初代の骨片を喰らうカニバリズム行為で表現される。初代が殺され火葬にされた後、箕浦がその骨灰を盗み食いするカニバリズム趣味のくだりには、初代の肉体と文字通り同化することを欲望する、いわゆるパタイユ流のエロスの演出が見出されるが、この行為で初代の存在は箕浦の内部で主体化されることになる。

この主体化こそが、物語を後半部へ転回させるギヤとなる。というのも、木崎初代は岩屋島の風景を箕浦に——ひいては読者に語って聞かせる役目を負うキーパーソンであり、物語の序盤早々に、読者を「孤島の鬼」の世界観に強く引き込む重要な「夢の中の景色」——すなわち岩屋島の回想風景の語り部であるからだ。そもそも、帝都・東京の中心

地のオフィスビルで働き、日比谷や銀座でデートを重ね、一見華やかで流行を追った都市風俗を享受している箕浦と初代であるにもかかわらず、この二人はそうした都会生活を軽佻浮薄なものとして嫌悪し、「お互いに勇敢なる現代人ではない」同士として惹かれあう。箕浦と初代は男女として惹かれあつたことはもちろんだが、その前提に、都会の喧騒とは相いれない孤独な感性を同じくする友としての同調があつたことを、テキストが強調している点を見落としてはならない。彼らのまなざしは今ここにある「現実」（それはテキスト内外を包括する意味での現実である）の東京風景ではなく、共に「夢の中の景色」へと向けられているのであり、初代亡き後、彼女の身体を喰らうことによつて彼女の視線と意志を内面化＝主体化した箕浦による東京脱出、すなわち〈風景探し〉の旅が「孤島の鬼」のメインテーマとなつていくのだ。

ともすれば、行き当たりばつたりに物語の筋を展開していき、矛盾の袋小路に追い込まれがちである乱歩の執筆傾向の常道とは異なり、「孤島の鬼」は序盤から登場人物の行動のルートがかなりはつきり定まっている。登場人物を広範囲に移動させ、事件の展開ごとに印象的な風景を用意する戦略性が、実際にその風景を求めて放浪した作家の体験

に裏付けられて、長編化する際のドラマツルギーに無理なく結実しているといえよう。このことは、江戸川乱歩の創作方法が、現実を歩いた土地の風景や実際に自分の周囲にいる人々から着想を得て、それをかなり大胆に転用しながら探偵小説のプロットに適う風景に至るまで昇華していく経緯を取る——換言すれば、まずは現実の写生から開始されるものであつたことを示しているとも言える。少なくとも風景に関しては、乱歩は自分の見た風景にかなり忠実に従っている。愚直なほどに自分の実見した風景に基づいて着想するから、幾つもの作品にわたつて似たような風景描写が頻出するのではあるまいか。そして、そうしたリフレインを重ねた風景描写は、いつしか現実の写生から逸脱し、いつかどこかで見た追憶の中の景色——乱歩視点で主観的に再構成された回想風景に組み替えられていくといった経緯を辿るのではなからうか。

それはあたかも、現実風景をいったんパワーズ化して、しかる後に、時間的にも空間的にも縮尺を変質させて組み立て直すジオラマ装置製作の過程に通じるもので、期せずして「孤島の鬼」構想時期と同時期にそうした風景画を試みる運動が画壇において生じているのも興味深い。乱歩は絵画にも関心が深く、愛好した画家といえば村山槐多が有名

だが、その槐多と日本美術院会員同士として親交が深かったらしい画家に不染鉄という人物がいる⁷。不染鉄はその代表作「山海図絵（伊豆の追憶）」（一九二五年）に見られるように、俯瞰構図と中国古典絵画の三遠法とを組み合わせ、現実の風景をいったん解体して再構成する表現を追究し、帝展に何度も入選した画家である。彼は「山海図絵（伊豆の追憶）」と対になる代表作「海村」を、一九二三年十一月二十日から十二月十五日まで開催された日本美術展覧会に出品して首席入賞を果たすが、この展覧会は関東大震災のために中止された帝展の代替で、主催は乱歩が当時勤めていた大阪毎日新聞であった。乱歩が不染鉄の絵を知っていたかどうかは推測の域を出ないが、あり得ない話ではない。

また、一九二〇年代からの苛烈な観光ブームによって需要が増した鉄道案内本の相次ぐ刊行により、一躍人気商業画家となった吉田初三郎の仕事も同時代傾向として関連付けられよう。鉄道省編『鉄道旅行案内』（一九二二年）で知られる吉田初三郎の鳥瞰図は、自身が実際に踏査した風土の景物を緻密に写生しつつ、それを現実風景にはあり得ない空間構成の中に落とし込んでデフォルメする方法で描かれ、その作風は当時「初三郎式絵図」と呼ばれ世間の注目を浴びた。この『鉄道旅行案内』の出版元は、『新青年』と

同じ博文館である。初三郎は桑名の鳥瞰図を三点描いたが、これらは一九三四年製作なので、残念ながら「孤島の鬼」連載後のことだ。しかし、一九一九年に「参宮要覧 伊勢名所図会」を刊行しており、これは広げると幅一メートルの大部なものでありながら小型に折り畳むことができ、携行用として便利であった。参宮線がはつきり描きこまれた鳥瞰図で、伊勢方面を放浪した乱歩が博文館繋がりでこの図会を入手していた蓋然性は充分あり得る。

江戸川乱歩は、連載を幾つも抱えた多忙な作家生活を送りながら、驚くほど全国各地を歩き回った作家だった。旅行記を書くタイプではなかったため、今日では彼がどれほど広範囲に旅をして廻ったかは存外に知られていない。しかし、その作品に描かれた風景描写からは旅の痕跡をうかがわせる手がかりが垣間見え、そこから探偵小説というジャンルに合う風景を模索する、存外に実直な乱歩の創作方法と時代との結節点を考察する糸口が見えてくるのである。そして、こうした風景探索の創作方法は乱歩以降の探偵小説ジャンルにも継承されていき、戦後における横溝正史の一連の岡山物や、松本清張が『旅』誌上で「点と線」（一九五七年二月〜五八年一月）を発表する時代を遠く用意したのではあるまいか。

【注】

1 この頃「孤島の鬼」は連載八回のあたりで、秀ちゃんの「手記」が読者に披露され、箕浦と諸戸が岩屋島へ渡る後半部の導入部にさしかかっていた。

2 一九二六年十二月〜二七年二月にかけて東西の朝日新聞に連載した「一寸法師」の出来が納得できず、自信喪失したため。旅費は円本の走りである現代大衆文学全集（平凡社）の『江戸川乱歩集』（一九二六年）の印税で賄った。

3 原文「黒島 海口より未の方海中十一町にあり回り六町余島に弁財天社あり穴二あり長五十間高サ四五間干潮には人往来す暗かり穴長凡四十間高サ一間許」。

4 「探偵小説四十年」（昭和八年度）の項に、次のような記述がある。「ちよつと断つておくが、岩田君とは同性愛文獻あさりの点で気が合っていたので、彼は私よりずっと年少であつたけれども、二人の間に同性愛関係があつたわけではない。よく旅をして一緒に泊まつたりしたが、私は彼と手が触つても嫌悪感を催すほどであつた。そういう意味ではなく（中略）非常にウマがあつたのである」。わざわざこうした記述をしなくてはならなかつた事態が、かえつて二人の仲についてはとかく周囲の噂があつた状況をうかがわせる。

5 桃源社版『江戸川乱歩全集』の「あとがき」（一九六一年十一月）には「鵬外全集の随筆」とあるのだが、乱歩はよく本の出典を取り違えるため、随筆ではなく小説「エタ・セクスアリス」であつた可能性は否定できない。また、この『鵬外全集』第五巻の「編纂者の

辞」を書いたのは与謝野寛なので、『明星』とも人脈のあつた岩田準一を考えると、いよいよ可能性が高い。

6 森鵬外「青年」第十一章および二十一章で、医学生の大村莊之助が小泉純一に対して「庇護するやうな口調」で話しかけたり、「なんと云ふ可哀い目付きをする男だらう」と同性愛を覚えるくだりがある。

7 村山槐多と不染鉄の交流は、不染鉄の側からの証言のみで、槐多の証言は現在のところ発見されていない。が、不染鉄は一九一五年に伊豆大島渡航の際、村山という人物から金を借りたと述べており、これが村山槐多ではないかと思われる。槐多自身、一九二六年と一七年に大島に滞在しているので、両者の接点が考えられる。また、一九一九年に槐多が亡くなった際には、不染鉄は深い哀悼の意を表した。（松川綾子「不染鉄——人と作品」『不染鉄之画集』二〇一八年三月 求龍堂）

8 北は恐山（一九三二年）から南は九州一周（一九三六年）まで。日本海側や瀬戸内へも足を運んでいる。乱歩は翻案小説「幽霊塔」（講談倶楽部）一九三七年一月号〜三八年四月号）の舞台を長崎県に設定したが、前年の九州旅行がその設定に影響したと考えられる。

※江戸川乱歩のテキスト引用は、すべて光文社文庫版『江戸川乱歩全集』に拠った。

（金城学院大学文学部教授）